

# 都市というパラドックス

— 江戸の都市空間と人 —

斗 鬼 正 一\*

## はじめに

人は自ら作り上げた秩序が存在する空間、コスモスでしか生きられない。地形、気候、水、動物、植物、といった自然がそのままの空間、さらには、人という動物自身の本能的行動などがそのまま発現されているような空間、すなわち混沌のカオスの中で生活していくことはできない。それゆえ人は動植物などを排除し、自らの行動を統制し、価値観を投影した空間を計画的に作ることによって、安心して生きていくことができる都市というコスモスを作ってきた。

今日の都市は、からみあう種々雑多な意図のベクトルとしてできていくのであり、絶対権力者が、その頭の中にある価値観を具体化するような完全なコスモスとしての都市を作ることは不可能だが、京都は桓武天皇が、江戸は徳川将軍が、それぞれ最高権力者として、意のままに作り上げたコスモスである。人が自らの意思を具現化した最大の文化が都市だとするなら、京都、江戸は、それを究極の形で実現したものである。そこで本稿では、先の京都に続き、江戸という究極の都市づくりにおいて、人が、自然、人、そして超自然にどう対抗し、都市空間を作り上げてきたのかを検討し、そこから見えてくる都市とは、さらには人とは、いったいどんなものなのかを考えていくことを目的とする。

## 第一章 自然というカオスの排除

### I. 自然の排除による都市空間

#### 動物、植物の排除

江戸の位置する空間の相当部分は、元々武蔵野の森、原野であり、またそこは、野生の動物たちが生息する空間でもあった。しかし人は植物が覆い尽くし、野生動物が跋扈するような空間では生きていくことができないから、植物を切り開いて空間を作り出し、動物を排除して自分たちの空間とした。

また一度排除した動物、植物は、すぐに侵入してくるから、放置しておけば、動物、植物の支配する自然の空間に戻ってしまう。したがって人にとってコスモスとしての都市空間の確保は、まずは、動物、植物という自然の排除から始まるのである。

#### 水の排除

人は水中、水上で生きていくことはできないから、都市空間を確保するためには、水という自然を排除することが必要である。江戸の場合、利根川やその名の通りの荒川は暴れ川であり、氾濫して人々の生活空間を奪う。それゆえ、堤防、遊水池、そして人工河川の掘削による流路の変更など、治水対策が不可欠である。

さらに江戸の町、つまり現在の東京都心のかなりの部分は元々海である。徳川家康が江戸にやってきた当時は、城の前の日比谷は入り江で、その東には新橋あたりまで岬が伸び、さらに東は海だった。日比谷入り江を埋め立てて大名屋敷を作り、堀を残して造成した一帯を日本橋などの商業地、町人地にした。さらに江戸が拡大してくると、現在の中央区、江東区にあたる地域にごみを運ばせ、埋め立てて、市街地を拡大していった。

2010年11月30日受付

\* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 都市人類学

水という自然の排除もまた、都市空間をコスモスとして確保する上で基本的要件というわけである。

## II. 人という自然の排除

### 外敵

外敵の侵入もまた、都市をカオスに引き戻す脅威となる。ヨーロッパや中国の都城は、周囲が市壁で囲われ、門を通してしか出入りができない。ところが長安を模したはずの平安京の場合は、市壁はなく、羅城門も倒壊したまま再建されていない。豊臣秀吉がお土居と呼ばれる堤で囲ったこともあったが、これもじきになくなっている。

江戸の場合は、市壁は設けられなかったが、建設当初は、戦国の世が終わったばかりの時代であり、軍事上の防御は十二分に考慮されて建設されている。すなわち、江戸城本丸を囲む内堀、その外側の外堀を初めとした堀で江戸の町を囲み、とりわけ北からの侵攻を恐れた幕府は、江戸城の北に神田川を開削させている。

### 犯罪者

犯罪は人の動物本能が統制されないままに発出したものであり、そのままではカオスへと引き戻されてしまうから、都市には犯罪を排除するための様々な施設が作られる。犯罪者は、獄舎、留置所、拘置所、刑務所に隔離され、さらには処刑場で殺されて、ケガレの浄化が行われる。そうした施設は、当初の日本橋小伝馬町、後の日光街道小塚原（荒川区）、東海道鈴が森（品川区）、近代以降でも、中野、巢鴨、小菅（葛飾区）のように、周縁に設けられている。

### 死

死は人が生きることを阻害する最大の自然の脅威であるから、死をケガレとし、火葬場、墓地といった施設を設けて、都市空間から排除、浄化しようとする。江戸の場合、これらが設けられたのは、周縁の小塚原、砂村（江東区）などである。

### 性

性もまた人のもっとも動物的な側面である。それゆえ生の動物性を統制、排除する仕掛けが、都市空間をコスモスとして維持するうえで不可欠で

ある。江戸は開府当時、男性人口が圧倒的に多かったので、京都などから業者が移って作られたのが公認の遊郭である。当初の吉原遊郭は日本橋の葦が茂る低湿地で、海に近い周縁に設けられた。江戸の拡大と共に都心となり、大火を機に移転させられて新吉原（台東区）となったが、これも浅草田圃と呼ばれた江戸の周縁である。さらには品川、千住、内藤新宿など、江戸から一つ目の宿場にも遊郭が設けられている。

近代には鉄道のターミナル周辺に歓楽街が作られているが、いずれにしる性というケガレは都市空間から周縁へと排除され、浄化されているのである。

## 第二章 カオスの侵入

### I. 自然の侵入

#### 自然災害

こうして自然を排除しコスモスとして確保した後も、都市空間には次々と新たな自然が侵入してくる。地震、雷、統制されない火である火事は身近な脅威として恐れられたが、さらには、台風、暴風、津波、水害、旱魃、そして富士山や浅間山の噴火まで、江戸の町には天変地異が続いた。いくら排除しようとしたところで、自然は次々侵入し、江戸時代の技術では、それを防ぐことはほとんど不可能だったのである。

#### 伝染病

伝染病も江戸の町を襲い、コロリと恐れられたコレラなどが蔓延した。細菌、ウイルス、そして防疫という医学的知識のなかった時代の人々にとって、これらの自然の侵入は大変な脅威で、防ぐことは非常に困難だから、都市空間はしばしばカオスへと引き戻されたのである。

### II 超自然の侵入

#### 超自然という説明原理

江戸時代において、こうした自然の侵入によるカオスへの科学的説明というものはほとんど存在しない。それゆえ、こうしたカオスに対する説明原理として登場するのが、超自然である。

## 河童

河童は水陸両生の4、5才の子供くらいの大きさで、とがたくちばしを持つ。頭の上の皿の水が力の源泉という妖怪で、水中に人や牛馬を引き込み、尻玉を抜いたり、生き血を吸ったりするという。

江戸でも、麴町の堀には河童が棲んでおり、近くを通る人を子供に化けて堀に引きずり込もうとしたし、麴町の飴屋十兵衛の店には子供の姿をした河童が堀から飴を貰いに来たという。弁慶堀では水中の子供を助けようとした中間が逆に引き込まれそうになり、生臭い臭いが4、5日とれなかったなどという話が伝わる。(松浦, 1977)

河童は空想上の生き物であるが、その姿は人間に似ているものの、あくまで人間ではない水棲動物である。水と動物を排除し続けてきた江戸の都市空間に、排除したはずの水棲動物たちが、妖怪に姿を変えて、侵入してきたというわけである。

## 狐, 狸, 貉

上野の山の穴稻荷(台東区)は、寛永寺を建立したことで棲家を追われた狐たちが悪さをするというので、これを慰撫するために天海が祀ったものといわれるが、他にも狸, 貉といった都市空間から排除されたはずの自然が侵入し、カオスへと引き戻そうとする例は多い。

1874(明治4)年、浅草寺の住職唯我詔舜僧正が寺の目付役だった大橋亘と相談して、寺を拡張するために近くの雑木林と藪を開墾した。ところが浅草寺内の伝法院、大橋家などで怪奇現象が続く、毎日のように屋内へつぶてが投げ込まれたり、台所の器物が踊りだしたりした。伝法院の台所では、御膳が急に動き出して天井へ舞い上がり、大騒ぎしているうちに元の場所へ戻ってくるし、茶碗が踊り、御盆が這いだし、米俵が天井へ舞い上がる。そしてなぜか10日間続けて、刺身50人前が台所におかれていた。そんなある晩、伝法院で火事があり、僧正の夢に狸が現れて、棲家を荒らされ困っている、神に祀ってくれればいたずらをやめ、火事も消してやるというので、狸の御宮や鎮護堂を作ったという。藪の中に長年住んでいて棲家を奪われた古狸の、開墾に対する復讐と考え

られたのである。(田中, 1999)

鉄道が登場した当初、狸, 貉, 狐が汽車に化けた話が各地に伝わる。日本で初めて汽車が走った品川では、八ツ山の下で狸が汽車に化けて本物の汽車に向かって走ってきたという。音も本物そっくりで、機関士は汽車を止めたり、あるいはそのまま向かっていったりしたが、なにも起こらず、線路に大きな狸が死んでいたというのである。

常磐線でも、貉が汽車に化けて本物と競争し、はねられて死んだといい、亀有駅そばの見性寺(葛飾区)には貉を葬ったムジナ塚がある。(田中, 1999)

鉄道という文明開化の技術は、人々の空間的移動に革命的影響を及ぼした、当時の人々は、そうした空間的距離を改変してしまう「縮地の術」である鉄道に対して、驚きだけではなく、畏怖、恐れ、念を感じた。さらにはすみかを追われた動物たちも同様のはずであり、これらが複合して現れたのが、復讐のため汽車に化け復讐しようとした動物の妖怪というわけである。

## 七不思議

七不思議は、古くから諏訪の七不思議、天王寺の七不思議など宗教に関係した場所のものが有名だったが、江戸では郊外の自然を排除して都市が拡大していくにつれて、周縁部に次々と登場した。中でもよく知られるのは「本所七不思議」で、ここにも水や、葦、狸といった動植物が登場する。

おいてけ堀…本所には昔、池や堀が点在していた。思わぬ大漁に気を良くして日暮れまでいると、堀の中から「おいてけ、おいてけ」と声がしてビクの中を見ると空っぽになっている。

片葉の芦…留蔵というならず者がお駒という娘に恋をしたが、相手にされなかったので、ある夜お駒を誘い出し、片手を切り落として池に投げ込んだ。それ以降、この池に生える芦は片方だけしか葉がなかった。

狸囃…月夜の晩に狸囃子が聞こえるが、音を聞いて近づくと、また遙か遠くに聞こえる。

足洗い屋敷…人が寝静まった頃、天井から大きな足が現れ、足を洗えと言う。家人が洗えば何事も起こらないが、洗わないと地鳴りをさせて大暴

れる。

無灯そば…夜更けに屋台の蕎麦屋の明かりが一つ灯っていた。近づいてみると誰もいない。いくら待っても屋台主も現れないが、いたずらなどをすると、祟りがある。

送り提灯…おぼろ月夜の晩に、ほろ酔いの武士が供の者と歩いていると、ぼつんと提灯の火が見えた。不思議に思って近づくと、また遠くにぼつんと提灯の火が見える。家に着くまで提灯の火はついてくる。

送り拍子木…雨模様の夜道に、夜廻りが火の用心を叫びながら歩いていると、自分とは違う拍子木の音が、ずっと付いてくる。

### 怪奇現象を引き起こす女

怪奇現象を持ち込むのは動物、植物だけではない。柳田国男の「巫女考」によると、江戸から明治にかけて、江戸市中の家で、池袋村の娘を女中にすると、まな板が沢庵ごと棚の上に上る、行灯が天井にひつつく、家の中にどこからともなく石が絶えず打ち込まれる、などという怪奇現象が起こるといわれた。

たとえば、文政の中頃、小石川水道端に住んだ御持筒組与力高須鍋五郎という男が、池袋生まれの下女に手をつけたところ、たちまち烈しい石打があった。種々の祈祷・守り札も効験がなかったが、騒動の最中にもその女だけは熟睡していることに気づき、訊ねてみると池袋の女であることがわかった。暇をやるとその日から石が飛ばなくなった。その娘はオサキ持ちの家の娘ともいわれた。(柳田, 1999)

この伝承は、川柳にも「下女が部屋 振動こいつ 池袋」、「瀬戸物どびんが みんな 池袋」と詠まれるほど知られていたが、元々は、池袋だけではなく、池尻（世田谷区）、沼袋（中野区）目黒等、江戸の周縁部出身の女とされていた。(宮田, 2000)

たとえば、寛保・延享の頃、大竹栄藏の屋敷で、天井の上で大石が落ちるような音がしたり、行灯が空中に浮かんだり、茶碗などが隣の部屋に動いたりした。台所の庭で米をついでいる人が休憩している間に、白が垣を越えて座敷の庭に移動した。

また、天井で物音がするので調べたが何も見つからなかったものの、上がった者が煤まみれで真っ黒になっていた、ということもあった。神主や山伏に祈ってもらっても効果がなく、ある老人に聞くと、池尻、池袋あたりの女を召し使っていないかと言われ、池尻の女に暇を出したところ、怪異現象はぴたりとおさまったと言う。(宮田, 2000)

### 幽霊、怨霊

死へと追いやられた人が元の姿に近い形で、恨みを晴らすために他界から立ち戻ってくるのが幽霊である。良く知られる皿屋敷の幽霊は、主家秘蔵の皿を割ってしまった下女が、井戸に投身したり惨殺されたりし、その幽霊が現れて皿の枚数を悲しげに数えるという話で、元々巷間に知られていた伝承を元に岡本綺堂が『番町皿屋敷』に描いている。

その番町皿屋敷に住んでいたのが、徳川秀忠の長女千姫で、大坂落城後江戸に戻り、通りかかる男を引き入れる乱行を続けた上、嫉妬から侍女らを古井戸に投げ込み虐殺した。千姫が死に、屋敷が取り壊された後も、殺された人たちの幽霊が出て、人も通らぬ「更屋敷」と呼ばれ、恐れられたという。(田中, 1999)

江戸の町では、私生活にともなう複雑な人間関係、特に金銭がからむ男女の葛藤がもとで殺された女が怨霊となる例が多かったが、お岩さんで知られる『東海道四谷怪談』も、四谷左門町に寛文(1661～73)ごろから伝わる田宮家の怨霊の話など、実際に当時巷間に広く知られていた怨霊話をもとに書かれている。

### 祟り

羽田稲荷は文政年間(1818～30)、名主鈴木弥五郎門が数町歩を埋め立てて鈴木新田開発を行ったとき、水害防御のため築いた土堤に松を植え、開発で追い出された狐たちを祀ったことから生まれた。明治になって穴守稲荷となり、近郊の行楽地となったが、敗戦後アメリカ軍が48時間以内の立ち退きを命令、現在地(羽田5丁目)に移築された。その際鳥居も移転されそうになったが、アメリカ兵が機械に挟まれる死亡事故や、鳥居か

らの転落事故2回が発生。祟りが原因とされて移転は中止、鳥居だけが羽田空港駐車場の真ん中に取り残された。祟りを恐れそのままになっていた鳥居がようやく移転されたのは、1999（平成11）年のことである。（宮田，1995）

### 第三章 超自然の排除

#### I. 江戸の立地

##### 四神相応の地

自然をどんなに排除したところで、都市空間には自然に加えて、超自然の脅威が次々と侵入し、都市をカオスへと引き戻す。それに対して、京都同様に、江戸もまた、その立地選定の段階から、対抗手段をとっていた。

風水思想では、都市は四神が守護する地におかれるべきとされる。すなわち北に玄武の住む山、東に青龍の住む川、南に朱雀の住む池や海、西に白虎の住む大道があるという四神相応の地形である。平安京の場合、北に船岡山、東に鴨川、南に小椋池、西に山陽道と、文字通り四神が守護する場所が選ばれ、船岡山から羅城門まで、南北一直線にメインストリート朱雀大路が作られたことはよく知られている。

実は江戸の場合も同様で、たとえば『柳営秘鑑』によると「およそ此江戸城、天下の城の格に叶い、その土地は四神相応に相叶えり。まず前は地面打開き、商売の便りよき下町の賑いは、前朱雀に習い、人の群り集る常盤橋、また竜の口の落口潔きは、左青竜の流れを表し、往還の通路は品川まで打続き、右白虎を表して虎門あり、うしろは山の手につき、玄武の勢いあり……」とある。

また、111度ほど左に回転しているものの、大手門から常盤橋の軸を平安京の朱雀大路とすれば、玄武は麴町台地、青龍は平川、朱雀は江戸湾、そして白虎は東海道に当たるとも説明される。

さらには、入江だった有楽町、日比谷一帯を埋め立てたのも明堂の南側（江戸では東南側）に平地が必要だったからとか、開削された道三堀が平安京の西堀川に対応しているなどとも言われる。（内藤，1988）つまり、風水の理想地形に完全に

は合致しなかった自然の地形に人工的に手を加え、理想の風水的地形を作り上げたというわけである。

##### 江戸城本丸

江戸城本丸も、陰陽道による好ましい立地が選ばれている。本丸の立つ台地は、上野台地、本郷台地、大塚台地、市谷台地、麴町台地、麻布台地、白金台地の合計七つの台地に囲まれ、七つの台地それぞれの頂上の延長線が交わる位置にあたる。これは陰陽道では「交差明堂形」と呼ばれる地形で、地の気が極めて高く、栄えるという。風水でも、こうした地形が仙人のてのひらに似ていることから「仙掌格」と呼び、大吉とされている。（宮元，2001）

##### 「の」の字都市計画

当初の江戸の都市計画は、関東の中心としての近世城下町の都市計画で、前述のように四神相応の、平安京の構成原理を導入している。城から大手門、本町を大手筋とし、城下に堀川が作られるなど、大坂、伏見、駿府、名古屋と似た、桃山時代に典型的とされていた都市計画である。

幕府の地と定めた1603（慶長8）年以降は、規模拡大の必要もあって、江戸以外であまり類例をみない「の」の字型右渦巻き状の都市計画が行われた。（内藤，1996）つまり江戸城は地理的な条件から西、北方面が防衛上の弱点で、その対策として幕府は新たに外濠を設け、周辺に、親衛隊である旗本、御家人の屋敷を配した。この結果江戸の町は、濠と川・海を結ぶと、城を中心に右回りの水の防御線がめぐらされるようになった。（斉藤，2002）これが城を中核とした「の」の字型右渦巻き状に外延する都市計画である。

こうした「の」の字の都市計画は、規模拡大の必要性のためと言われるが、荒俣宏は、右回り渦巻き型都市計画は、江戸城に永久に龍脈エネルギーを導入するためであるという。（荒俣，1999）

##### 東海道五十三次と江戸の象徴的位置

内藤正敏は、江戸幕府の設定した五街道は、徳川家の権力構造を図示するものだという。すなわち、東海道には五十三次の宿場が設けられたが、内藤は、この53という数字が、華厳経善財童子

が53人の善知識を訪ねる故事に基づくという。これによれば、善財童子は最後に普賢菩薩の十大願を聴いて、西方阿弥陀浄土に往生せんと願うに至るから、京都は西方阿弥陀浄土ということになる。つまり東海道は、江戸が光の国、この世であり、他方京都は、死者の住むあの世の時空間、闇の国となり、天皇は生きたまま死者の国、過去の時空間に封じ込められたのだという。そして明治政府の東京遷都は、天皇を京都御所の奥深くから引き出し、東京へ移すことによって、過去、あの世から、現在、この世の時空間へ連れ戻した、というわけである。(内藤, 1996)

### 奥州, 蝦夷地

日本橋から南西に向かう東海道は日本の中心軸であり、都に通じる光輝く道であったが、対して東北に向かう奥州街道、日光街道は、奥州、蝦夷地、そして日光にある徳川家王陵に通じる闇の道であった。すなわち、奥州、蝦夷地は、阿弥陀浄土、極楽である都に対して地獄、闇の国とされてきたし、(内藤, 1996) 征夷大將軍というのも、統制にまつらぬ少数民族を征服する將軍という意味である。すなわち奥州、蝦夷地とは、征夷大將軍のいる江戸に対する被征服地であり、実は徳川將軍家を陰から支える空間とされたのである。

### 久能山

徳川家康の遺体が最初に運ばれた久能山(静岡市)は、補陀落山久能寺があったところで、日光二荒山も補陀落山からきている。補陀落とは現世の仏・観音の浄土のことであり、関八州は、日光山、久能山に守護されることにより、現世の仏・観音の支配する観音浄土とされたのである。(内藤, 1996)

## II. 入り口を護る

### 六地藏

地藏菩薩は、釈迦の没後、弥勒仏が出現するまでの無仏の期間、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道の六道で苦しむ衆生を教化、救済する菩薩で、平安時代から広く信仰されるようになった。六道の救済に当たることから六地藏信仰が生まれ、六地藏は墓地の入り口や村の境界に

置かれた。

京都では、奈良街道・六地藏の大善寺(伏見六地藏)、西国街道・上鳥羽の浄禅寺(鳥羽地藏)、丹波街道・桂の地藏寺(桂地藏)、周山街道・常盤の源光寺(常盤地藏)、若狭街道・鞍馬口の上善寺(鞍馬口地藏)、東海道・四ノ宮の徳林庵(山科地藏)が知られ、現在も、8月22, 23日に都の出入り口、街道沿い6カ所に祀られた地藏菩薩を巡拝し、罰障消滅、家内安全、無病息災、家運繁栄を祈願する行事「六地藏巡り」が行われている。

伏見地藏の大善寺に残る1665(寛文5)年の『六地藏縁起』によると、これらの寺院に安置された木像地藏菩薩立像は、小野篁が一度冥土へ行き、地藏菩薩を拝して甦った後に、木幡山の一本の桜の大木から六体の地藏尊像を刻み、木幡の里(大善寺)に祀ったものである。都の疫病流行を見た後白河天皇が、この地藏尊像を信仰し、皇位長久、王城守護、旅人の安全、庶民の疫病退散、福德招来を願い、1157(保元2)年都の出入り口に祀るよう平清盛に勅命した。清盛は西光法師に命じ、街道の入口に六角堂を建て、一体ずつ分置し「廻り地藏」と名付けたという。

また『源平盛衰記』には「西光法師、七道ノ辻毎に六体の地藏菩薩を造り奉り七か所に安置す」とあり、その場所は四宮河原、木幡里、造道、西ノ七条、蓮台野、美曾呂池、西坂本であったとしている。

都は「京の七口」と呼ばれる七つの街道の出入りに配された大地をつかさどる地藏菩薩によって、守護されていたのである。(宮元, 2001)

江戸の場合、その入口を守護する六地藏は二種ある。一つは空無が1689(元禄2)年に発願、1691年に開眼したもので、一番駒込瑞泰寺、二番千駄木専念寺、三番日暮里浄光寺、四番下谷七軒町心行寺、五番上野大仏堂慈濟庵、六番浅草寺正智院であり、二番だけが現存する。

今一つは、深川沙門地藏坊正元が1705(宝永2)年に発願、享保の初めに開眼したもので、一番品川の品川寺、二番新宿の太宗寺、三番はおばあちゃんほんせんの原宿で知られる巣鴨の真性寺、四番浅草山

谷の東漸寺、五番深川の霊岸寺、六番同じく深川の永代寺であり、六番以外は現存する。一番は東海道品川宿に、二番は甲州街道新宿にあり、三番は中山道沿い、四番は日光街道沿いで、江戸の外側を向いて立てられている。

### 五色不動

桓武天皇は平安京を築くと同時に、古代神話に荒ぶる神「大將軍」として登場するスサノオノミコトを京都の四方に配して、都の守護としたという。例えば『都名所図会拾遺』では、『首楞嚴經』<sup>しゅりょうこんぎょう</sup>を引用し、大將軍の注として「おのおの鬼神を領して四方を鎮護す」と述べている。また『近畿遊覧記』にも、王城四方の鎮護に大將軍社を建てたとされている。これら東西の大將軍神社と南北の大將軍神社を結ぶ線の交点は、大内裏の正門・朱雀門の位置にぴったり重なるともいわれる。(宮元、2001)

江戸の場合、これに類似するのが五色不動である。不動尊は、大日如来の命を受けて魔軍を撃退し、災害悪毒を除き、煩惱を断ち切り、行者を守り、諸願を満足させるが、五色不動とは青不動、黄不動、赤不動、白不動、黒不動であり、それぞれ地、水、火、風、空を表す。

江戸では、天海が將軍徳川家光の命により左青竜、右白虎、前朱雀、後玄武の四不動を江戸城の守護とし、家光がこれに目黄不動を加えて不動の目とし、五色不動を指定した。神道に加えて仏教の力も借り、東西南北中央の五方眼で江戸を防護しようとしたのである。(平、2007)

目黒不動(目黒区)・・・江戸五色不動の第一で、808(大同3)年、円仁が下野国から比叡山に赴く途中、不動明王を安置したのが開創という。

目白不動(豊島区)・・・元は文京区関口の新長谷寺本尊で、家光の信仰厚く、鷹狩の途中で拝し、城南の目黒に対して目白と呼ぶべしといったことから、目白不動となり、あたりを目白と呼ぶようになったという。1945(昭和20)年、戦災で寺が消失したため、金乗院に移し、合併した。

目赤不動(南谷寺、文京区)・・・元は三重県赤目山で授かった赤目不動だが、寛永年間(1624-44)鷹狩りの途中立ち寄った家光の命により目赤

不動となった。

目青不動(教学院最勝寺、世田谷区)・・・元は勸行寺(現港区)の本尊だったが廃寺となり、数学院に移っている。

目黄不動・・・台東区の永久寺と、東栄寺(墨田区)本尊が移された最勝寺(江戸川区)の二つが知られている。

## Ⅲ. 方除け

### 北の守り

平安京の人々にとって、北は暗く、寒く、敵が潜む世界と捉えられてきたが、さらには平安京は阿弥陀浄土の極楽とされたのに対し、北は闇の国、蝦夷地、奥州は、異界、地獄とイメージされてきた。こうした北の脅威から王城を鎮護するために、桓武天皇は、御所の北、鞍馬に鞍馬寺を作らせたし、近くには、王城鎮護の神社である上賀茂神社、下鴨神社の奥の院の性格を持つ貴船神社もある。

江戸の場合、北に当たる日光は、元々関東最大の修験道の霊地で、北極星は不動であり、天の中心、天皇の象徴とされていたが、(内藤、1996)この日光に埋葬されたのが徳川家康である。

### 日光

徳川家康は茶屋四郎次郎から京都の流行と聞いて食べた鯛のテンブラで胃腸をこわし、1616(元和2)年4月17日死亡した。(渡辺、1988)家康は、遺体を久能山に納め、葬礼は増上寺に申しつけ、位牌は故郷三河の大樹寺(岡崎市)に立て、一周忌が過ぎた後日光山に小堂を建てて勧請すること、関八州の鎮守になることを遺言した。実際には久能山奥社の廟に埋葬され、葬儀は吉田神社(京都市)の梵舜によって唯一神道の神式で行われた。家康の死は神に祝うものであるという理由で、葬儀では香典を一切受け付けなかったが、天海は家康が死の瞬間から神になったとし、比叡山に伝わる山王一実神道によって大権現として祀ったのである。この東照大権現は、天照大神と同体の山王権現を配祀神として従えるから、天皇の天照大神より上の日本最高の国家神としたというわけである(内藤、1996)

翌1617(元和3)年には遺骸は日光に移され・

奥の院に安置、一周忌に遷宮の式が行われた。二代秀忠によって建てられた社殿は東照社と呼ばれ、三代家光は新社殿を作った。また家康入国以前からの聖地で、常念仏堂や、16の寺があった江戸城紅葉山には、まず山王社、ついで東照宮、歴代将軍の御霊屋が設けられ、紅葉山は江戸城内の聖空間となった。(内藤, 1996)

久能山において神として再生された東照大権現は「宇宙を主宰する神」と一体化されたことが示され、(高藤, 1996) 日光は日本最高、最大の聖地となり、歴代将軍は、東照大権現の神威を直接自らの体内に招き込むために日光社参を行ない、家康月命日の17日には紅葉山の東照宮に参詣した。(内藤, 1996) 徳川家康は死して後も遺体となっても江戸を北の闇から守り続けるというわけである。

#### IV. 鬼門封じ

鬼門は牛寅、東北の方向で、邪悪なものが侵入してくる方向とされる。平安京でも、御所の鬼門にあたる一条戻橋には陰陽師安部晴明が住み、さらに赤山禅院などの寺社、そして比叡山には延暦寺がおかれ、都の鬼門の守りとした。

#### 神田明神

江戸・東京の鎮守様は、南は日枝神社(千代田区)だが、北は神田明神(現神田神社, 千代田区)である。社伝によると天平2(730)年創建で、武蔵国豊島郡江戸芝崎にあり、天慶の乱(939-940)に敗れた平将門の首が付近に葬られると天変地異の怪異が続き、付近の住民は窮していた。それを知った時宗の真教上人が将門の祟りを鎮め、1309(延慶2)年には将門を祭神として合祀した。

徳川家康は、将門を尊崇して神領を寄進、江戸城鬼門の駿河台に移転、さらに1616(元和2)年に同じく鬼門の現在地に移転し、江戸総鎮守に相応しい麗な桃山風の社殿が幕府により築かれた。神田祭は天下一の祭礼として天下祭、御用祭とも呼ばれ、江戸市中を挙げての祭礼として盛大に行われた。華麗な山車が36台以上も江戸城内に入り、将軍が上覧したという。(宮元, 2001)

#### 柳原土手

神田堀(神田川)が一直線に流れており、たび

たび洪水を引き起こすので、城を守ろうと南岸に作られたのが柳原土手である。(街と暮らし社, 2002)『江戸名勝志』に「柳原土手西は筋違橋(元の万世橋)より東は浅草橋迄の間、長さ十丁余(約1.1キロ)つづけり。柳樹多くあり」とある柳は、『柳森神社記』によると1458(長祿2)年、太田道灌が江戸城の鬼門除けに植えさせたという。また享保(1716-35)の初め、八代吉宗が、昔の柳が枯れて柳原土手の名だけになっていたので植えさせたのだともいわれる。(児玉他, 2002)

1869(明治6)年に土手は撤去されたが、現在も残る柳森神社は、方除け稲荷と呼ばれている。

#### 護持院

常陸筑波山の別院知足院の隆光僧正は、五代将軍綱吉、桂昌院の寵を受け、江戸城鬼門を鎮める寺をつくりそこに住みたいと申し出た。それを受けて綱吉が神田橋門外に建てた密教の巨刹が護持院である。(司馬, 2009)

隆光はここで将軍継子出生を祈願、桂昌院など奥女中の信仰を集め、寺領1500石を与えられ、大僧正に上り詰めた。その後護持院は1717(享保2)年に焼失、護国寺と合併したが、跡地は季節風の際江戸城の風上になるので火除け地とされ、寂しい護持院が原となり、護国寺と合併した寺自体も、明治になり廃寺となっている。

#### 東叡山寛永寺

上野公園、東京国立博物館、国立科学博物館、国立西洋美術館、都美術館、東京文化会館、動物園など、文化施設が並ぶ上野の山は、江戸時代東叡山寛永寺の境内だった。幕末の闘いで焼かれ、今は本堂など一部しか残っていないが、江戸で最も重要な巨刹であった。

山号の東叡山は東の比叡山の意で、延暦寺が延暦年間に創建されたゆえに延暦寺なのに対し、寛永寺の本坊完成が1625(寛永2)年だったために寛永寺と名づけられた。その後1627(寛永4)年に法華堂、常行堂、東照宮、1630(寛永7)年に釈迦堂、清水観音堂、五重塔、祇園社が建てられ、1635(寛永16)年頃には一大伽藍が出現したが、根本中堂は延暦寺根本中堂を模しているし、ない堂は、法華経をとる法華堂と、阿弥陀



経の念仏をとなえる常行堂を渡り廊下で連結する比叡山独特の形式である。また、寛永寺根本中堂の場所は、慈覚大師が中国五台山から移植した比叡山根本中堂の竹をここに移したため、竹の台と呼ばれる。(内藤、1996)

つまり東叡山寛永寺は比叡山延暦寺の「うつし」として作られたのだが、その延暦寺は、都の東北、鬼門に位置し、都の鬼門の守りとして作られた寺である。つまり上野の山、寛永寺は、比叡山延暦寺に倣った江戸の鬼門の守りというわけであり、他にも上野の山には天海が比叡山の恵心僧都作の本尊を置いた清水観音堂があり、琵琶湖になぞらえた不忍池には、天海が琵琶湖竹生島巖寺の弁財天を勧請した上野弁天堂が建立されている。上野山下には比叡山のさらに東北、鬼門封じの日吉大社(大津市)の門前町坂本から地名をうつした坂本町が作られた。

1627(寛永4)年には、寛永寺に隣接して家康を神として祀った上野東照宮も建立され、天海も、死後自分の分身である毛髪を慈眼大師毛髪塔に埋め、身をもって江戸の鬼門を守っている。

### 浅草寺

浅草寺は、628(推古36)年、漢人の系譜を引くひのくまのはまなり檜前浜成、たけなり竹成兄弟が隅田川から一寸八分の黄金の聖観音像を網で引き上げ、はじのあたいなかとも土師直中知の自宅に祀ったことが始まりといい、635(大化元)年に勝海上人が草堂を建て、857(天安元)年に円仁が中興したという伝説を持つ江戸の産土神(地霊)の一つである。

江戸以前からの天台宗の寺院だが、家康はこの寺が江戸城の鬼門に当たるため、徳川家の祈願寺に定めた。それまで祀られていた三神に加えて、後には家康自身も神となって祀られた。(宮元、2001)境内は雷神門を入れてすぐの南谷、隨身門前の東谷(中谷とも)、北側の竹門を入ったあたりの北谷に分けられていたが、これも比叡山延暦寺に倣ったともいわれる。(竹内、2000)

### 筑波山

現茨城県域でも、谷和原村の光明院は江戸城の鬼門にあたり、厄除けのために建立された家康ゆかりの寺である。

さらに先の筑波山は、古来山岳信仰の霊山で、山の中腹以上、黒門から上全体がご神体とされたが、江戸の鬼門鎮護を担って、江戸にことあるごとに調伏の祈禱が行われた。筑波山神社も江戸の鬼門にあたるため、將軍家の祈願所として歴代將軍の厚い保護を受けている。

### 三囲神社

民間でも鬼門封じの神社を持つ場合がある。三み囲神社(墨田区)は、1673(延宝元)年日本橋に開店した越後屋呉服店の後身である三井銀行や三越本店の位置からちょうど鬼門、丑寅の方向に当たる。加えて、三囲の囲は三井の井を取り囲んで守り、さらに三という数字はそれを一層強固なものにする数であるというので、三井家は三囲神社を鬼門封じと三井の守護神とした。1716(享保元)年には土地を寄進、社地の拡張に努め1723(享保8)年には第三代の三井高房が願主として社殿を壮麗に改築し、幾度かの修造や再建も行っている。

そのほか、京都の蓮華王院三十三間堂をうつした浅草三十三間堂、室町時代創建の神田駿河台の太田姫ほつしやう稲荷神社、1573(天正元)年創建の柳島妙見堂法性寺も江戸城の鬼門除けとして建てられたものである。

## V. 裏鬼門封じ

### 日枝神社

日枝神社は、江戸の守護神として江戸氏が祀った山王宮に始まるが、日枝神社となったのは、天海が比叡山の鎮守である日吉大社を分祀してからである。場所も二代秀忠の江戸城大改造の際、城内紅葉山から元山王(千代田区隼町国立劇場付近)に遷祀され、1657(明暦3)年の明暦の大火の後には港区赤坂の現在地に移っているが、いずれも江戸城裏鬼門である。

比叡山はもともと日枝山といい、日吉山とも書く。江戸の分祀は日枝神社だが、明治元年からのことで、古くは日吉山王社、日吉山王大権現社などと称され、氏子には「お山」として親しまれて来た。鳥居も日吉鳥居と呼ばれる形で、正面拝殿前の左右、普通の神社なら狛犬がいるところに日

吉大社の神獣、猿が置かれている。神田神社の神田祭とともに江戸三大祭に数えられる山王祭では、江戸時代、猿のついた山車が先頭を進んだが、これは裏鬼門から災難が「去る」という縁起担ぎである。(宮元, 2001)

### 増上寺

徳川家康は、三河以来の徳川家の菩提寺が浄土宗であったため、1590(天正18)年、江戸の浄土宗の名刹増上寺を将軍家の菩提寺と定めた。元は江戸城の裏鬼門にあたる貝塚村(現国立劇場あたり)にあったが、日比谷、霞が関を経て、1598(慶長3)年、江戸城の裏鬼門に当たり、東海道の口を守る現在地(港区芝)に移された。(内藤, 1996) 増上寺近くには、京都の愛宕神社のうつしとして愛宕神社も作られている。

このほか、内藤新宿の時の鐘で知られる天龍寺も、もと牛込納戸町にあり、裏鬼門鎮護の寺とされた。

## 第四章 カオスに対抗する排除されたもののパワー

### 1. 排除された自然のパワー

#### 動植物のパワー

大国魂神社(府中市)では害虫を駆除し、五穀豊穡を祈願し、病気平癒、悪疫防除のために、からす扇、からす団扇が授与されるが、これはカラスを神につながる動物と考え、そのパワーを用いようとするものである。こうした動物のパワーをカオスへの対抗に利用する例は、開発にともない排除したはずの狐を稲荷として祀り、祈願するという例にも見られる。

想像上の動物の例としては、曹源寺(台東区)が「かっぱ寺」として知られる。新堀川(現合羽橋道具街通り)あたりの土地は低い上、水捌けも悪かったため、住民たちは難渋、見かねた合羽屋喜八が私財を投じて掘削工事を行った。この工事にはかつて喜八に命を助けられた隅田川の河童たちが協力し、そのおかげで工事が完成した。

それゆえ、1814(文化11)年に没した喜八の菩提寺である曹源寺には河童が祀られているのだ

が、(田中, 1999) この河童を見たものは不思議と商売が繁昌したと伝えられ、曹源寺の河童大明神は、商売繁昌、火水難除などに霊験著しいといわれて、現在も信仰されている。

穴稲荷は、上野の山から追われた狐の居場所として作られたといわれるが、開発で排除され、人を化かす、怪奇現象を引き起こすなどと排除された狐たちが、今度は人々が願をかける対象となったのである。

かつて天皇は、熊野、吉野といった自然の支配する森という空間に盛んに入ることによって、植物の放つ霊威のパワーを身に付けようとしたが、(中沢, 2005) 明治天皇も死後、深い森が作られた明治神宮(渋谷区)の奥にこもり、国家のための神として祀られている。

#### 将軍の死体による鬼門封じ

徳川家康は日光に、2代秀忠は増上寺に埋葬され、3代家光も、遺言により東叡山に移された後、初七日には日光に向かい、大黒山に埋葬された。

4代家綱、5代綱吉は、遺言により寛永寺に埋葬され、寛永寺は徳川家祈願寺かつ菩提寺となったが、秀忠を埋葬している増上寺の抗議により、6代以降は、双方に埋葬されることとなり、幕末までに、寛永寺には4, 5, 8, 10, 11, 13代の6人、増上寺には2, 6, 7, 9, 12, 14代の6人が埋葬された。

平均的な葬法は、三重の木棺に入れ、さらに銅棺に入れて石室の中に入れ、棺と棺の間には、石灰、木炭、練香を詰めるというものであるが、南霊屋の秀忠の廟は、宝塔台座の直下に1.8m四方の真四角な石室があり、輿に入れられたまま木棺に葬られていた。ミイラ化した遺体は爪、髪も残り、きちんと鬘を結び、冠を着け、手に扇子を持ち、大小の刀をそばに置いていたが、あぐらをかいて拜殿を向いて座る様子は、まるで生きているようだったという。

1958(昭和33)年から1960年の調査では、北霊屋の5人のうち6代家宣の遺体が発掘された。家宣の墓は初期の秀忠のものに比べると堅牢で、石を積みあげた槨の内側に石室を築き、その中の銅棺と三重の木棺のなかに遺体があった。棺と棺

の間には、防湿のための石灰と防腐のための朱(硫化水銀)が埋められ、遺体は内大臣の正装の束帯姿で笏を持ち、太刀をかたわらに置いてあぐらをかいて座っており、耳かきや小鏡までそろっていたという。(鈴木、1999)

内藤正敏は、将軍の遺体を防腐処理して永久保存し、生けるがごとき不気味な姿で地下の闇から江戸城を守護し続けることを願ってのことと言い、(内藤、1996) 宮元健次も、生きているような姿で寛永寺、増上寺に埋葬されていたことは、将軍自らが江戸の鬼門と裏鬼門を守り続けるため、としている。(宮元、2001)

さらに遺体そのものではないが、江戸の呪術的都市計画を進めた天海も、毛髪を寛永寺に埋めている。

### 不浄門

江戸城平河門は、不浄門とされ、城内での死者や、松の廊下で刃傷事件を起こした浅野内匠頭といった、死や犯罪というケガレを排除する門だったが、この平河門も、江戸城東北の鬼門の方向に設けられている。

### 刑場による鬼門封じ

初期の刑場は、東海道を下り、高輪大木戸の手前の三田(港区)の海岸沿いにあった。鈴ヶ森は東海道をさらに下り、品川宿の先、大井村の一本松に、1651(寛永4)年に造られた。小塚原の刑場は日光街道を下り、千住宿の手前、現在の南千住駅付近である。どちらも、江戸から街道を連行された刑死者は泪橋で親族と最後の別れをし、公開の場ではりつけ、火あぶり、鋸挽、獄門などで処刑されたあとは放置され、野犬の群れに貪り食われるという、凄惨な、地獄のような場所であった。小塚原だけで20万人が処刑されたとされるが、さらに小塚原には火葬寺もあり、この一帯は江戸市中の死、死体を排除する空間であった。

刑場とは、都市空間にカオスを生じるケガレとしての犯罪を排除し、浄化するための施設である。したがって空間的には当然周縁に設けられるのだが、これらが街道の江戸入り口にあたる宿場の近くに作られたのは、一つには見せしめによる犯罪抑制効果を狙ったためであるが、実は小塚原は江

戸の鬼門、鈴ヶ森は裏鬼門に当たるからでもある。すなわち、死という自然は人にとって最も恐るべきことで、死も死体も、最大のケガレであり、すさまじいパワーを持つものと考えた。それゆえ、鬼門に置き、ケガレのパワーを用いて江戸の都市空間への超自然的脅威の侵入を防ぐという目的があったのである。

### 回向院

回向院(墨田区)は明暦の大火の犠牲者を隅田川河口の牛島という中洲に運び、増上寺の子院を建てたのが始まりである。さらに1783(天明3)年の浅間山噴火で流れ着いた死体、水難者、無縁仏などを弔うが、この場所が選ばれたのは、一つには隅田川東岸が他界と認識されていたためである。(尾河、2000)そして今一つは、かつて武蔵、下総の国境であったここが江戸の出入り口にあたることであり、死、死体という最大のケガレのパワーを用いて入り口を守るという意味もあったのである。実際回向院では、供養を兼ねて勸進相撲を開催したが、力士は生きた仁王として江戸を守り、不幸な死者を慰め、冥府の世界から両国橋を渡って侵入しようとする邪霊を踏み破る役割があったのである。(荒俣、1999)

## II. 性のパワー

### 吉原遊郭

江戸の市街はずれた浅草田圃の吉原には、幕府公認の遊廓が置かれた。物忌みの日、江戸の町人はケガレを祓う日として夫婦が性交を慎んだが、吉原では逆に紋日として客を盛んにとる日だった。(宮本、1986)つまり吉原は、性というケガレを江戸の都市空間から排除し、浄化する場だったのである。

そうした吉原の立地は、実は小塚原のすぐ近くであり、江戸の周縁であることに加えて、日光街道の鬼門にあたる江戸の出入り口でもあった。性とは、人の動物性に直結する自然であり、生命を作り出す行為でもあり、大きなパワーを持つものと考えられた。そうした性のケガレのパワーを、死のケガレとともに用いて、江戸の出入り口を守ろうとしたというわけである。

## 江戸四宿

性というケガレを排除、浄化する遊郭は、東海道の品川宿、甲州街道の内藤新宿、中山道の板橋宿、日光街道の千住宿にも置かれた。これらもまた江戸の周縁でもあるが、みな江戸の出入り口であり、ここに性というケガレのパワーによる結界を作ろうとしたのである。

## II. 排除された人のパワー

### 被差別民

刑場で刑の執行、死体の処理などに従事したのは非人という被差別民であり、江戸の非人の8割以上を掌握する2人のうち車善七は小塚原にも近い浅草に、非人頭の松右衛門は鈴が森に近い品川に屋敷を与えられていた。

付近には共に、病気の囚人を預かる小屋、溜も設けられていたし、吉時のコトホギ、凶時のヤクバライも行った。彼らの持つケガレを清めることができる聖なる呪力というパワーは、都市空間を浄化し、カオスを排除するために必要だったのである。

同様に河童も、実は、河原に生き、都市をカオスに戻してしまう水という自然に立ち向かった人たちが賤視された姿であるといわれる。江戸初期には掘割、水道などの技術者、人夫たちが全国からやってきたが、仕事がなくなった後は周縁に住み、(大野, 2000) 賤視され、河童とされたが、他方で彼らのパワーもまた大明神などとして都市のカオスを排除する上で利用されたのである。(田中, 1999)

### 怨霊のパワー

現在も東京の北の鎮守は神田明神(神田神社)であり、神田祭は今も盛大に行われているが、その一ノ宮は、大黒様、大國主命とも呼ばれ、国土経営、夫婦和合、縁結びの神とされる「大己貴命(オオナムチノミコト)」、二ノ宮は、この神社では、商売繁昌、医薬健康、開運招福の神「えびす様」とされる「少彦名命(スナヒコナノミコト)」を祀っているが、三ノ宮に祀られているのは、現在に至るも、東京最大の怨霊と恐れられる「平将門命(タイラノマサカドノミコト)」である。明

治に入り、朝敵が主祭神では皇室にはばかられるというので、神社は1873(明治6)年、古記録を根拠に祭神を変更したが、氏子は収まらず、誰も祭りをしようとしなかったという。ようやく復興したものの、2日目には台風が襲来、福沢諭吉は鎮守の旧恩を忘れたための将門の怨霊の祟りだとした。(小木, 1978) 1984(昭和59)年には遷座祭が執行され、将門は再び主祭神に戻されたのである。

こうして恐るべきカオスをもたらす最強の怨霊であるはずの将門が、今日に至るまで「弱きを助け、強きを挫く」神として、江戸、東京の守護神として崇敬されているのである。

### 将門首塚

山城の国と丹波の国の国境にある首塚大明神(京都市)は、首から上の病気に霊験あらたかと信仰されているが、ここに埋められているのは都人に恐れられた大江山の鬼、酒吞童子である。

将門首塚の場合は、国境どころか東京のご真ん中、千代田区大手町にあるが、ここもまた、怨霊将門の首塚であり、祟りで恐れられながら、他方で安全祈願から商売繁盛まで、さまざまな祈願に訪れる参拝者が絶えない。

明治時代には、政府が塚の上に大蔵省庁舎を建てたところ大蔵大臣が急死、他に13名もの関係者が次々と死亡し、あわてた大蔵省は庁舎を取り壊して鎮魂祭を行った。紀元2600年を奉祝した1940(昭和15)年には、付近に雷が落ち、火の手が上がった。この年はちょうど将門没後1000年に当たる年でもあったため、これもまた将門首塚の祟りとされた。

終戦直後には、進駐軍が一带を駐車場にすべく整地作業を開始したところ、ブルドーザーが塚まであと数十cmという所で突然転覆、運転手が死亡するという原因不明の事故が起き、地元の人から酋長の墓だという連絡を受けて、泣く子も黙るGHQが工事を中止している。

1961(昭和36)年には、首塚の東側の土地に日本長期信用銀行のビルが建てられたが、そこは首塚の旧参道上だった。2年後の1963(昭和38)年頃、塚に面した各階の部屋の行員が気づ

ぎに発病。首塚を管理する神田神社の神官を招いてお祓いをする騒ぎになった。その後も、首塚に不敬にならぬようと、塚に面した部屋の行員の机は、窓側を向くか、横向きにしていたという。

1973（昭和48）年には、首塚を挟んで二つのビルの新築工事が行なわれたが、丁重に供養をしてから工事にかかったビルは何の事故もなかったものの、無関心だったビルでは地下の工事中に2人の作業員が死亡し、怪我人も続発したという。（宮元、2001）

今日でも、ドラマなどで将門を取り上げる際は、祟りを恐れた関係者がお参りする、というほど恐れられており、コスモスの中心たる首都のど真ん中に、いまだに誰も手を出せない超自然の恐るべきパワー、カオスが侵入したままなのだが、他方でそれが、強力な祈願の対象とされている、というわけである。

#### 将門にかかわる神社

宮元は、将門の死体の一部や身に着けていたものを祀った神社、塚が、すべて五街道と堀の交点である城門に隣接しているという。すなわち、首塚（首）－大手門（奥州道）、神田神社（胴）－神田橋門（上州道）、鳥越神社（手）－浅草橋門（奥州道）、世継稲荷神社（首桶）－田安門（上州道）、津久土八幡神社（足）－牛込門（中山道）（田安門前から家康が移転）、平河神社（不明）－半蔵門（甲州道）（平河門内から家康が移転）、鎧明神（鎧）－四谷門（甲州道）、兜神社（兜）－虎ノ門（東海道）である。（宮元、2001）

江戸の町では、交通の要所である「の」の字型の堀と五街道の接点に橋を架け、城門と見張所が置かれて、江戸市中への出入りをあらため、江戸の治安をはかったが、さらに将門の死体やそれに類するものを切り刻み、神社や塚として祀り、そのケガレのパワーで、江戸に侵入する悪鬼を封じようとしたというのである。（加門、1996）

#### 西郷隆盛の御霊

西郷隆盛は西南戦争で逆臣とされたが、1889（明治22）年憲法発布の際に特赦、正三位を追贈された。上野公園の銅像建立はそのときから計画され、1899（明治32）年に序幕された。

西郷の死んだ1877（明治10）年には火星の大接近があったが、望遠鏡で見ると、陸軍大将の軍服を着た西郷の姿が見えると話題になり、西郷星と呼ばれた。正三位が贈られた12年後にも再びその噂がはやったという。西郷が死んだことを認めようとせず、インドに逃げた、朝鮮半島に渡り機会をうかがっている、という流言も流れ、1891（明治24）年にはロシアに潜伏している西郷がロシア皇太子訪日の際、一緒に帰国するという話も広まった。かつてフランスから買入れ曳航中に沈没した軍艦畝傍を西郷が率いてくるという説もささやかれている。

田中聡は、上野公園の西郷像は、こうした強烈な生きざままで伝説を生み出した男は、御霊となった場合の祟りも強いゆえ、銅像で顕彰するという近代的方法で、御霊を祀り鎮めようとしたのだといい、御霊は守護してくれる神ともなるから、この地で散った彰義隊の霊を鎮めおさえてくれるパワーをも期待したのかもしれない、という。（田中、1999）

いずれにしろ、御霊という恐るべきパワーを持つものを、他の恐ろしいものからの防御に利用しようとした、というわけである。

#### 霊

お岩稲荷、お玉稲荷、幸助稲荷、三吉稲荷などは、憑き物となった狐の霊、人の霊が取り付いた人を祀ったもので、祈願することで、そのパワーを出世、延命、子安、病気予防平癒、防災といった現世利益に利用しようとしたものである。

### おわりに

#### I. カオスの排除と逆襲

人は植物が繁茂して覆い尽くす空間、ほかの動物が占拠する空間では、そもそも身を置くこともできないし、水中では生存自体不可能である。また急峻な土地では住居を作ること、移動も生産活動も困難である。だから空間を切り取り、内と外、中心と周縁といった境界線を設定し、動物、植物を外へ排除し、山を削り、谷を埋め、湖沼、海を埋め立てる。さらに身を置く空間を確保した

としても、水、食物などを確保しなければならぬから、川の流れを変え、植物、動物を栽培、飼育する。そうして切り取られた空間が都市空間であり、都市を作ること、都市が拡大することは、即自然を排除、統制することにほかならない。

他者もまた自然同様に、生きていくことを阻害する存在である。したがって、他者と我々を分け、他者、犯罪者などを外へと排除し、あるいは周縁に追いやって差別、統制しようとする。

こうして確保された都市空間は、自らの価値観を投影して統制した空間であり、そのなかで安心して生活していくことができるコスモスというわけである。

ところがそうして確保されたコスモスには、外から、排除したはずのカオス、すなわち動物、植物、そして外敵などが絶え間なく侵入してくる。さらには時に妖怪となり、霊となって、逆襲を試み、都市をカオスに引き戻そうとする。

また内でも、人は争い、怒り、妬み、憎しみ、怨み、妖怪、怨霊が生まれ、怪奇現象が起こり、人々自身に襲いかかり、都市をカオスへと戻してしまうのである。

## II. カオスに対抗するカオス

そうしたカオスへの対抗手段として、まずは四神相応といった立地を選び、外からのカオスの侵入を阻止するための方除け、鬼門封じを設ける。さらには外からの侵入阻止と内で発生したカオスを清める浄化装置として、墓地、刑場、遊郭などを周縁に作り出す。

そうした際に注目しなければならないのが、河童、狐といった動物、遊郭の性、刑場、墓地、火葬場の死体、とりわけ将軍の死体などのケガレのパワーが利用されること、犯罪者や、性、死、病、犯罪などに対処させられた遊女、被差別民といった周縁に追いやられた人々のパワーが利用されることである。

さらには怨霊や鬼も、神として崇め奉り、供養と祭祀を行うことで、江戸の都市空間というコスモスを護る強力な守護神、御霊へと転化するし、さらには明治天皇のように、死者そのものが崇り

性を払拭した神霊となって守護する存在となり、現代に至るまで東京最大の祈願の対象となっているのである。

## III. コスモスとカオスというパラドックス

排除したはずのカオスのパワーを用いてコスモスを護るというのは、まさにパラドックスだが、排除先とされる外のカオスの空間も、単にコスモスを脅かす存在というわけではなかった。江戸というコスモスを作り出すためには、動物、植物、性、死、犯罪、鬼、怨霊の類を排除する空間が必要で、そうした外の、カオスの空間を作ることによってこそ、内なるコスモスを作り出すことができる。内なる空間、コスモスを実感するためにも、対比空間として、外、異界、他界が利用される。

こうしたパラドックスは、そもそもコスモスを作り出す人自身が、コスモスの主体であること、いわば内なる者であることを実感する仕掛けにも見出される。すなわち、カオスをもたらず人々を周縁へ、外へと排除し、差別すること、さらにはそうして外なる者として排除される人々の存在自体が、主体が主体であり、内なる者であることを確認させ、実感させてくれる。同様に、外は内を、妖怪は人を、写し出す鏡であり、妖怪を、外を、他者を、そして外のカオスの空間を垣間見ることこそ、内を、人を、そしてコスモスを見ることを可能にさせる。

均質、平板でない都市空間を作り出してこそ、人の心は想像力によって活性化され得るわけで、それゆえに、カオスこそがコスモスに不可欠というパラドックスが生じるのである。

## IV. 人、都市というパラドックス

いずれにしろこうした自然は、カオス、自然を排除して作り出した都市というコスモスの背裏に密かに寄り添い、いくら振り払っても、浸み出してくる。そして実は、そうしたカオス、自然の存在を必要とするのは、常にそれらを排除しようとする都市、そして人そのものなのである。

こうして江戸の都市空間とは、都市、人という存在が、常に相反する二側面を持ち、それらの弁

証法的過程として存在するものであることを示すわけで、まさに人という存在自体がパラドックスとしての存在であることを示しているともいえよう。

#### 参考文献

- 荒俣宏, 1999, 『江戸の快樂』, 文藝春秋  
 府中市郷土の森博物館, 2008, 『武蔵府中くらやみ祭』, 府中文化振興財団  
 加門七海, 1996, 『平将門魔方陣』, 河出書房新社  
 児玉幸多他, 2002, 『東京都の地名』, 平凡社  
 小松和彦, 1988, 『異界が覗く市街図』, 青弓社  
 街と暮らし社, 『江戸・東京歴史の散歩道』, 2000, 街と暮らし社  
 松浦静山, 1977, 『甲子夜話』, 平凡社  
 宮元健次, 2001, 『江戸の陰陽師 天海のランドスケープデザイン』, 人文書院  
 宮本由紀子, 1986, 『江戸の遊廓』, 国書刊行会  
 宮田登, 1985, 『妖怪の民俗学』, 岩波書店  
 宮田登, 1995, 『空港のとなり町羽田』, 岩波書店  
 宮田登, 2000, 『ヒメの民俗学』, 筑摩書房  
 内藤昌, 1988, 『江戸城と城下町』, 『江戸東京学事典』 小木新造他編, 三省堂  
 内藤正敏, 1996, 『魔都江戸の都市計画』, 洋泉社  
 中沢新一, 2005, 『アースダイバー』, 講談社  
 小木新造, 前田愛編, 1978, 『明治大正図誌』 東京 (1),

#### 筑摩書房

- 岡本綺堂, 2005, 『番町皿屋敷』 『岡本綺堂戯曲選集』 第4巻, 青蛙房  
 尾河直太郎, 2000, 『遺跡でつづる東京の歴史』 下, 一声社  
 大野芳, 2000, 『河童よ, きみは誰なのだ』, 中央公論新社  
 斎藤慎一編, 2002, 『江戸の町を歩いてみる』, 中央公論新社  
 桜井進, 2000, 『江戸のノイズー監獄都市の光と闇』, 日本放送出版協会  
 司馬遼太郎, 2009, 『本所深川散歩』, 朝日新聞出版  
 鈴木尚, 1997, 『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』, 鈴木尚, 矢島恭介, 山辺知行編, 東京大学出版  
 平直方, 2007, 『夏山雑談』, 『日本随筆大成』 第2期第20巻, 吉川弘文館  
 高藤晴俊, 1996, 『日光東照宮の謎』, 講談社  
 竹内誠, 2000, 『江戸の盛り場・考』 江戸東京ライブラリー 11, 教育出版  
 田中聡, 1999, 『東京妖怪地図』, 祥伝社  
 渡辺善次郎, 1988, 『巨大都市江戸が和食をつくった』, 農山漁村文化協会  
 柳田国男, 1999, 『巫女考』, 『柳田國男全集』 第24巻, 筑摩書房

#### ホームページ

- 護国寺 <http://www.gokokuji.or.jp/>  
 日枝神社 <http://www.hiejinja.net/index.html>  
 日吉大社 <http://www6.ocn.ne.jp/~hiyoshi3/>